

「進歩的」保守派知識人ティーラユット・ブンミー

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

教授 玉田 芳史

1. はじめに

ティーラユット・ブンミーが 2017 年 3 月 3 日に、プラユット政権に苦言を呈する記者会見を行い、マス・メディアで大きく報道された。セミナーや講演会ではなく、報道陣を集めて会見を開き、政局批評を行うのが彼のスタイルである。彼はなぜ注目され報道されるのか。以下では、タクシン政権時代とスラユット政権時代に話題を集めた発言を紹介した後、インラック政権以後の代表的な発言を順にかいつまんで紹介することで、彼が進歩派の衣をまとった保守派であることを示したい。

1.1 ティーラユットと学生運動

ティーラユットは 1950 年に生まれ、68 年にチューラーロンコーン大学工学部に入学し、72 年に大学生自治会の全国組織「全国学生センター」の書記長になった。彼は書記長時代に日本製品不買キャンペーンをはじめとする国産品愛用運動で名前をあげ、学生運動の活性化に寄与した。彼は 73 年に憲法制定を要求するビラを仲間とともに配布して逮捕され、釈放を要求する運動が長期軍事政権を崩壊させる 10 月 14 日政変へと発展した。これは学生革命と受け止められている。ティーラユットは、当時の学生運動を代表する指導者であったため、民主化の英雄として歴史に名前が刻まれている。政変後、軍隊や警察とつながる保守勢力による巻き返しやテロ行為が相次ぐようになると、多くの活動家が弾圧を免れ、森に入って共産党ゲリラに合流した。ティーラユットもその 1 人であった。77 年成立のクリーンサック政権が恩赦でゲリラに投降を促す政策を採用すると、中国共産党からタイ共産党への支援打ち切りと相まって、森から都市への帰還者が相次いだ。その中には外国に留学し、研究者になる者が少なくなかった。ティーラユットはオランダに留学し、85 年に帰国してタムマサート大学社会学・人類学部の教員になった。彼は 90 年代以後旺盛な執筆活動を始める。多くは欧米の理論の紹介である。

日刊カーオソット紙によれば、ティーラユットがマス・メディアの注目を集めるようになったのは、プレーム政権時代に世論調査を行ってからであり、2 つの理由がある。1 つは彼が「十月人」¹と総称される 1970 年代の学生運動参加者の代表だからで

¹ 『本誌』2016 年 11 月号、15-16 頁。

ある。もう1つには、彼が有名な知識人だからである²。さらに、彼が耳目を集めるキャッチコピーを考案し、時宜を見計らってマス・メディアに予告した上で発表する点も付け加えておくべきであろう。つまり営業努力である。

1.2 タックシン政権時代「政治の司法化」

2006年4月25日の国王訓話をきっかけとして政治の司法化（司法積極主義や違憲審査）が始まった。ティーラユットは、司法による政治への監査や統制を好意的に表現する語句（tulakanphiwat）を作った。この新語は瞬く間に人口に膾炙^{かいしや}した。ティーラユットは「政治の司法化（その2）」と題する記者会見を06年8月2日に開いた³。裁判所が同年4月総選挙に無効判決を下し、選挙管理委員に実刑判決を下して失職させたのは正しいことであった。この政治の司法化は選挙偏重の民主主義を修正し、立憲主義重視の民主主義を促進する。政治の司法化を真剣に推し進めれば、政治の改革につながるかも知れない。彼はこのように述べて、政治の司法化へ声援を送った。にわかに始まった政治の司法化は、軍隊の政治介入と併走する形で、現在も続行中である。

1.3 スラユット政権時代「亀飼いの仙人」

2006年9月19日にタックシン政権を打倒する軍事クーデタが決行された。首相に就任したスラユットは、タックシン派の勢力を根絶した上で、総選挙を実施し民政移管を行うという任務を負っていた。

ティーラユットは、2007年2月25日に会見を開いて、スラユット政権への苦言を呈した⁴。ティーラユットは冒頭で「これまで政治批評は民主主義のための戦いだった。これからは社会のためにも戦わなければならない」と述べた。

「スラユット政権の最優先課題はタックシン政権の正当性をすっかり剥ぎ取ることである。」明確な証拠に基づいて汚職を摘発すれば、内外のタックシン支持者は減るだろう。「向こう3年から5年の間は、タックシン派が盛り返す可能性はなくなる。」それゆえ、「スラユットは総大将になって」指導力を発揮するべきである。ところが、スラユット政権は、「亀を飼う仙人」の政権である。内閣も国会も諸機関も任命されているのは、高齢のテクノクラートばかりである。それは、自分勝手な方向へののろろと這い回る亀である。ティーラユットはこのように政権のスピードと毅然さの不足を批判した。

² “Karani thammakai sukka cak Thirayut Bunmi karani khon khon dio”, Khaosot, March 7, 2017.

³ “Thirayut Bunmi poet ekkasan tulakanphiwat 2”, Prachathai, August 2, 2006.

⁴ “At ratthaban rusi liang tao Thirayut ci tang ko.ko.lang khwamchoptham maeo”, Phucatkan Raiwan, February 26, 2007.

2. インラック政権

2007 年 12 月に行われた総選挙では、タックシン派が勝利した。08 年 2 月に発足した政権は、黄シャツ派の反政府デモの末、同年 12 月に憲法裁判所の判決で崩壊した。代わって、陸軍の力添えを得た民主党がアピシット政権を発足させた。政権交代は選挙によるべきと考える赤シャツ派が勢力を拡大し、09 年と 10 年にバンコクで反政府デモ集会を開いて厳しい鎮圧の対象になった。11 年 7 月の総選挙ではタックシン派が勝利し、インラックが首相に就任した。民主党政権時代にはおよそ 2 年間にわたって沈黙していたティーラユットは、政治批評を再開した。庶民派の赤シャツと保守派の黄シャツの対立について論評し、バラマキ政策によって籠絡^{ろうろうく}されず汚職を許さない国民の力で政治を変えようと訴える内容であった。

2.1 2012 年 3 月 18 日

ティーラユットは 2012 年 3 月 18 日に「政治分析：今日の危機の行方」と題する記者会見をタムマサート大学で開いた⁵。タイの歴史を振り返ると、中間層は 1973 年 10 月 14 日政変以後に、草の根の庶民（赤シャツ派）は 2006 年 9 月 19 日クーデタ以後に、政治的自由を享受するようになった。「赤シャツ派は重要性が増しているけれども、投票したり集会に参加したりするだけにとどまり、政治構造を変えていこうという理想をもった政治運動にはなっていない。」

タイでは都市部と農村部、あるいは富裕層と貧困層の隔たりが大きい。「農村部は経済発展のための資源や労働力を供給し、選挙での投票つまり民主的な正当性を提供してきた。」農村部は奪われるばかりであった。「草の根の政治の登場は、権力、富、威信、名誉を農村部へ取り戻す過程に等しい。」今日のタイには、保守派と草の根の 2 つの権力中心があり、現状では赤シャツ派のほうが有利である。理由は、保守派が魅力、民主的正当性、柔軟性の 3 点で劣るからである。

「タックシンとプアタイ党は長期的には有利な立場にある。」だが、「タックシンは草の根民主主義を構築しようとしているわけではない。そのことは庶民向けの演説に示されている。帰国願望ばかりである。」「タックシンは民主主義の指導者というよりも市場の指導者である。」庶民に自身を売り込もうとするばかりで、政治や経済の改革を目指しているわけではない。

数日後の 3 月 23 日に、ティーラユットは「市民とタイ民主主義の将来」と題する講演を行った⁶。冒頭で「本日は学術面を重視する。政治批評よりも気楽である。政治

⁵ “Thirayut fanthong kanmuang thai mai mi thang ok raya san khwammairucak im nai sapsin amnat khong Thaksin”, Matichon, March 18, 2012

⁶ “Kham to kham Thirayut Bunmi phut thung nathi phonlamuang po.cho.to. bok mai yak wican kanmuang phro tong phak fun ik nan”, Matichon, March 23, 2012.

批評は多くの人たちに影響が及ぶ。報道された後に、自分は体調を崩して入院したり、静養したりすることになる。だから、社会のために話すのだと自らを鼓舞しなければならない」と述べて、発言の影響の大きさを誇示した。講演の要旨は次の通りであった。タクシン政権はポピュリズム政策を打ち出し、2005年以後の政治危機を招いた。この政治対立を打開する糸口は、「強い社会、強い地域社会、強い市民」である⁷。

2.2 2012年12月7日

2012年12月7日のセミナーで、ティーラユットは「タイ政治の展望」という講演を行った⁸。赤シャツ派と黄シャツ派が対立してもタイの政治は変化しない。なぜならば、「いずれも政治に覚醒した人びとの集団にとどまり、政治運動ではないからである。政治運動には明確な政治的理想が必要である。」赤シャツ派の反エリート姿勢は幻像に過ぎず、大きな変化にはつながらない。他方、黄シャツ派の国家主義や王党主義は偏狭で広がりがなく、国の進路を変えることができない。もし軍事クーデタが起きれば国に大きな損害をもたらすことになる。軍隊の政治介入はプラスにならない。政権の汚職、国会による憲法改正や恩赦法制定といったことがなければ、暴力とクーデタの繰り返しという悪循環に立ち戻ることはない。これからの5年間は、黄シャツ派は保守派勢力へ、赤シャツ派は地方政治勢力へと自然に成長していくであろう。

3. PDRC 蜂起

ティーラユットはタクシン派（赤シャツ）と反タクシン派の対立に膠着状態を予想していたものの、2013年10月に包括的な恩赦法案への反対が盛り上がり、ステープが率いるPDRCによるインラック政権打倒運動が活発になると、力強い応援演説を行った。

3.1 2013年12月10日

彼は、2013年12月10日にタイ新聞記者協会で、「タイ政治の将来と関連づけてホイッスル革命を眺める」と題する会見を行った⁹。それは国会解散の翌日であり、選挙よりも改革の優先を主張するPDRCを支持する内容であった。これまでの改革がうまくいかなかったのは、1973年以後の政治が金権政治であり、政治家にも公務員にも汚職が蔓延してきたからである。最たるものはタクシン派政権である。誰もが改革には

⁷ カーオソット紙の評論は、ティーラユットがタクシンの非を批判するばかりで、2010年の虐殺事件にまったく触れなかったことを批判した。“Lum 91 sop”, Khaosot, March 23, 2012.

⁸ “Thirayut fan thong anakhot 5 pi khang na klum sua luang daeng lae khlikhlai eng doen na sam sewana chai 108 wethi thua prathet”, Matichon, December 8, 2012.

⁹ “Thirayut Bunmi nun patiwat nokwit nae ko.po.po.so. khayai kanmi suanruam sang chanthamati”, Prachathai, December 10, 2013.

関心を持たなかった。

PDRC の重要性は、民主主義かどうか、多数派の声を尊重しているかどうか、反乱かどうかではなく、汚職にまみれる悪政を打倒する権利や義務の遂行という点にある。抵抗権は、古来、思想家が肯定してきたものである。PDRC の人民革命では、人民が協力して政権を倒すだけでなく、政治体制の設計にも参加する。これはタイでは前例のないことである。ただし、人民革命は君主からの裁可、軍隊・警察・官僚制からの承認、すべての国民からの承認が必要である。PDRC は承認を得られるように努力を重ねる必要がある。

3.2 2014 年 1 月 15 日「マンゴーが熟して落ちてくる」

ティーラユットは 2014 年 1 月 15 日にタイ新聞記者協会において、「タックシン体制が最期を迎えれば、タイに新しい土台を作れるか」と題する声明を発表した¹⁰。PDRC のデモ隊が首都バンコクの封鎖に乗り出した直後のことであった。彼はタックシンを手厳しく批判し、PDRC にタックシン派を根絶し、タイ政治に新たなページを開くように呼びかけた。

「タックシンは民主主義者ではない。際限のない利益追求の妨げになる国家権力を否定する無政府主義者である。」「選挙はタックシンの家族が交代で国家権力を握る手段である。」「選挙で「選ばれた政府であっても、汚職をすれば、解任されたり打倒されたりする。」PDRC は「政治家の悪辣ぶりに我慢ができなければ、投票を妨害してもよい。しかしそれは法律違反であることを知っておく必要がある。」

インラック政権が選挙で勝利をおさめると、タックシン体制が強まり、改革のチャンスは失われる。代案は革命的な変化である。タイでは軍隊が君主制に寄り添っているため、大規模な人民革命が起きる可能性はない。タイで可能なのは、平和な改革つまりコンセンサスに基づく革命である。PDRC はすぐには勝利できなくても、我慢強く平和に改革を促し、機が熟すのを待つという戦略を用いるべきである。

4. プラユット政権

軍隊は PDRC の要望に応えるように 2014 年 5 月 22 日にクーデタを行った。NCPO (クーデタ評議会) は閣僚を統制できない仙人内閣の弊害を避けるために、プラユット首相に権力を集中する政権を発足させた。

4.1 2015 年 3 月 26 日

2015 年 3 月 26 日にマヒドン大学の討論会で、ティーラユットは「人生経験から見

¹⁰ “Thirayut nae muanchon maha po.cho.cho. chai thritsadi mamuang lon su ca chana baep santi lok plum”, Matichon, January 16, 2014.

たタイの政治改革」と題する発表を行った¹¹。ティーラユットは、まず、NCPOが秩序回復に成功したことを称えた。しかし、和解よりも、政治家・実業家・公務員による権力濫用や汚職の撲滅を優先すべきと主張した。タイでは権力がいつも偏在してきた。権力者は、1932年に王侯貴族から文武官僚へ交代し、73年以後は政治家と資本家へ交代した。公務員はかつて支配者であったものが、公僕へと変わった。実際には政治家と資本家への奉仕者であり、その結果汚職が激増した。改革実現には、行動様式、価値観、社会構造の3つすべてを改革する必要がある。これは難題であり、軍人が不慣れだから手間取っているわけではない。

政治改革は可能なところから着手すべきである。庇護恩顧の政治文化を民主主義の文化へ変える必要があり、権力者への監視を国民に行わせるべきである。軍隊は秩序回復を期待されて政治に介入した。しかし、政権も担当した結果、成果が出なければ批判を受けることになる。首相が強権を発動して汚職や不正を摘発するのは支持調達に役立っている。しかし、首相は強権発動をいつまでも続けることはできないので、国民の役割を拡大すべきである。

4.2 2015年8月27日

ティーラユットは2015年8月27日にタムマサート大学で「国民の権利と権力」と題する講演を行った¹²。民主主義を40年にわたって支持してきたものの、PDRCのデモ隊の登場で、民主主義観が変わった。「多くのタイ人は民主主義を特定の目的を達成するための手段と捉えている。」政治家も庶民も資本家も同様である。「このように手段であると捉えるようになると、捨てたり休んだりしてもよいということになる。」

2014年クーデタ以後は、政治危機は憲法起草で解決できるという考え方が広まっているが、法律で民主主義を定着させることはできない。「庶民が民主主義をまだ受容しないのは、首都住民よりも劣っていると見下されているからである。庶民は自己卑下をしている、と私は考えている。庶民が強い市民になるには、自尊心や自信を持たなければならない。庶民は自分の本当の権力に気づいていない。」

記者からプラユット首相の人気低下について問われると¹³、「首相の人気は、暴力を阻止したこと、筋が通った性格、清廉と信じられていることに由来する。」「人気はまだ低下していない。しかしこのまま放置し、何も改めないと、社会から疑問を投げかけられる」と答えた。

¹¹ “Thirayut Bunmi chi kho.so.cho. chai amnat phiset hai tem thi nai sathanakan phiset”, Prachathai, March 27, 2015.

¹² “Thirayut chi prachathipatai tong kracai su prachachon yang thaecing”, Post Today, August 27, 2015.

¹³ “Thirayut chi kho.po.po.[khanakammakan yutthasat kanpatirup lae kanprongdong haeng chat] sup thot amnat yaonan mai chai thang ok panha”, Prachathai, August 28, 2015.

4.3 2016年4月5日

ティエラユットは2016年4月5日にタムマサート大学で「法律、貧民、格差、開発」と題する講演を行った¹⁴。彼はその中でNCPO政権による改革への批判を行った。クーデタから2年になるが、NCPOは改革を実行していない。今後の見通しも暗い。しかし、手遅れというわけではない。

総選挙後の政権には改革を推進できるだけの強さがないので、NCPO政権は改革をすぐに実行すべきである。プラユット首相が十全な権力を握っている間に改革を断行せず、新憲法の規定により総選挙後に5年間の経過期間を設けて改革のために民主主義を犠牲にするというのは筋が通らない。

憲法起草を通じて改革を実行しようというのは正しくない。重要なのは、国民を改革に参加させることである。NCPOはいろいろなことを実行してきた。とくに重要なのは社会の秩序維持である。しかし、数年後には元の木阿弥になっていると考える。必要なのは、国民に汚職監査権限の行使を学ばせることである。

「プラユット首相の人気は高い。これは集会やデモを禁止し、国民が反対の声を上げられないからである。」総選挙後には軍隊が権力を温存すると予想される。その政権が支持を得られるかどうかは、国民次第である。「相変わらず選挙に辟易し、選挙を恐れるならば、国民は支持するかも知れない。」

4.4 2017年3月3日「プラユットが曳船の政権」

ティエラユットは2017年3月3日に選挙管理委員会が主催するセミナーに講師として招かれたついでに、庁舎内で記者会見を開いた¹⁵。軍事政権に睨まれることを懸念する選管に配慮するかのように、冒頭で「会見はNCPOに敵対するわけでも味方するわけでもない。かつて1年ごとに行っていた情勢分析という学術活動である。ここ3年間に行っていなかった。今や、社会にとって有益と思われる助言・提言を行う必要が生じたと考えた」と断った。確かに、会見は14年1月以来であった。

プラユット首相は「愉快で、安心でき、秩序を保ち、新しい政策を打ち出す首相」である。それでも「権力構造の改革はできないと信じる。」NCPOは、政党や政治家が危機の原因であり、権力や役割を削減しなければならない、と考えている。これは間違いである。政党や政治家は反省しており自ら改革する。NCPOは政治家叩きではなく、国民に権限と責任をもっと持たせるような戦略を構想するべきである。それに加えて、格差解消のための改革も必要である。富や権力を持った人びとの間には、人

¹⁴ “Thirayut pramoen kho.so.cho. patirup paek chi rang michai anurakniyom”, Thai Rat, April 5, 2016.

¹⁵ “Thirayut Bunmi wiphak kho.so.cho. yut rua yong pom rua phuang”, Matichon, March 4, 2017.

脈形成に由来する特権の恩顧関係がある¹⁶。それらの人脈は裁判の判決、政府のプロジェクト立案や予算配分に影響を与える。恩顧関係のゆえに、汚職が不可避になる場合もある。

和解には時間がかかる。右派が左派を武力で叩きつぶしたタイの1976年10月6日政変以後の左右両派の和解には15年ほどかかった。総選挙後に「かつての対立が再開されるとは思わない。大衆動員が容易ではなくなっているからである。」「Win-Winの形で決着をつけるために話し合いを始めるべきである。」NCPO 政権が取るべき最善策は、改革を実現して、対立を防ぐことである。秩序維持に綻びが生じると政府への信頼が低下する。政府は総選挙実施への行程表を守るべきである。」

暫定憲法44条の行使は、選挙に由来する政権にはできないことである。「こうした特別な権限があるうちは有効・有益に活用しなければならない。それというのも、タイ人は権力で押しつけられることを容認する面があるからである。」強権を発動して、国民を参加させ、国民の権力を拡大することで、改革を成功させる必要がある。

NCPOの報道担当将校は、翌日の3月4日に謝意を表明した。「NCPOはティーラユットに感謝する。なぜなら、ティーラユットは優れた政治分析で有名であり、政治の分析や批評を通じていつも打開策を示してくれるからである。問題解決の参考になる。改革があまり進んでいないという批判については、国内に問題が山積していることを認めなければならない。しかしながら、まったく進んでいないという意味であれば正しくない。」

5. おわりに

5.1 同僚からの批判

タムマサート大学の人類学者ユッティ・ムクダーウィチットは、ティーラユットを次のように批判した¹⁷。ティーラユットは報道される機会がほかの学者よりもずっと多い。しかし、国民のために活かしていない。ティーラユットは軍事政権を肯定し、寄生するための発言を繰り返している。ティーラユットは、軍事政権に接近して名を売りたい後進の学者にとって手本となっている。

ユッティが浴びせる批判は具体的には次の通りである。第1に、軍隊が民主主義体制を打倒したことを批判しない。軍人が民主的ではないと批判することを避ける。武力によって国民から権力を奪い取ったという不当な権力獲得を批判しない。

第2に、軍隊による人権侵害を批判しない。軍事法廷を用いた人権侵害に言及しな

¹⁶ Nualnoi Treerat and Parkpume Vanichaka, "Elite Networking through Special Executive Courses", in Pasuk Phongpaichit and Chris Baker (eds), *Unequal Thailand* (Singapore: NUS Press, 2016), pp.73-96. という話題の研究を踏まえた指摘である。

¹⁷ Yukti Mukdawicit, "Ngan wichakan baep yu kap phadetkan hai pen", March 6, 2017 (<https://blogazine.pub/blogs/yukti-mukdawijitra/post/5960>).

い。威嚇脅迫、恣意的な逮捕、暫定憲法 44 条のような法律を隠れ蓑にした恣意的な権力行使といったことを批判しない。

第 3 に、刑法 112 条の不敬罪に言及しない。不敬罪に関わる司法過程の人権侵害に言及しない。不敬罪摘発については、NCPO 政権も関わっているが、そのことには言及しない。

第 4 に、NCPO の政策の失敗を批判しない。NCPO は和解を達成できないだけでなく、政治対立に拍車をかけている。

第 5 に、軍隊に独裁的な権力をもっと行使するように^{そそのか}唆している。

タムマサート大学にはティーラユットを厳しく批判した教員がもう 1 人いる。2014 年クーデタ後、不敬罪の嫌疑をかけられてフランスへ亡命した同大の歴史学者ソムサク・チアムティーラサクンは、「10 月 14 日政変への寄生虫」という文章を 2007 年に書いていた¹⁸。「ティーラユットは、『記者会見』を開き新聞の見出しを飾るにふさわしいような関心や尊敬に値することを 10 月 14 日政変以後に何かしたであろうか。皆無である。」「ティーラユットがここ 20 年間に行ってきたことは、折に触れて『記者会見』を開くことだけであった。彼にこれが可能なのは、10 月 14 日政変への寄与で有名だからである。」「多数の活動家や大衆が血肉を捧げ関与した『10 月 14 日という木』を寄生虫のように『食べ物』にしているのである。」

5.2 保守的知識人

ティーラユットは 10 月 14 日政変への寄与ゆえに、民主化の闘士や進歩的知識人のイメージが強い。彼の政治批評にはそうした立場が反映されているのであろうか。今回紹介した発言では、汚職＝タクシン派、汚職撲滅＝改革＝民主化という立場が貫かれている。これは民主主義の擁護論ではない。彼は一貫してクーデタを肯定し、選挙民主主義を軽視してきた。人権や自由の軽視でもある。これは 2005 年以後のタイにおける主流派マス・メディアの論調と合致している。つまり、ティーラユットは時流に合わせた発言を繰り返してきたことになる。タイ語には「料理に香草パックチーをふんだんに散らす」(phakchi roina) という言葉がある。表面を取り繕うことを意味する。ティーラユットは、現状追認的な政治批評に、軽い辛口コメントを散らすことで、アクセントをつけることに長けている。彼は進歩派と見なされることが多いものの、実は人権派でも民主主義者でもなく、保守的な知識人である。そのことを彼の発言で確認して結びに代えたい。

ティーラユットは、保守派知識人にありがちな、庶民は無知で無学で貧困ゆえに騙され買収されるので参政権に値しないなどという乱暴な主張はしない。しかし、2015

¹⁸ 『本誌』2013 年 11 月号、6 頁。

年 8 月に、「庶民が民主主義をまだ受容しないのは、首都住民よりも劣っているから見下されているからである。庶民は自己卑下をしている。庶民が強い市民になるには、自尊心や自信を持たなければならない」と述べて、庶民を民主主義者ではないと断罪するのは、まさに庶民への蔑視のゆえであろう。見下されているから民主主義を支持しないのではなく、蔑視・偏見のゆえに支持していないと決めつけられているにすぎない。選挙を切望する赤シャツと拒否する黄シャツや PDRC、どちらが民主主義なのかは自明である。それにもかかわらず、ティーラユットにとって、庶民は教育や指導を通じて「市民」へと矯正される存在にすぎない。それと関連して、2007 年 2 月に汚職を摘発すればタクシン支持者が減ると述べたとき、庶民のタクシン派支持熱を汚職摘発で冷まそうという意図が窺える。

また、軍隊の政治介入にも寛大である。彼は 2012 年 12 月には、クーデタは大きな損害をもたらすと否定的な見解を述べる一方、暴力とクーデタの悪循環の再来を予感していた。ここでの暴力は反政府デモ隊への取り締まりを指していると想像される。しかしながら、デモ隊の取り締まりが激烈を極めたのは 09 年と 10 年のことであり、クーデタが起きた 06 年でも 14 年でもない。赤シャツ派デモ隊への取り締まりについては奇妙なほど言及しない。彼が暴力の引き金としてあげる「政権の汚職、国会による憲法改正や恩赦法制定」はタクシン派政権による政治的攻勢である。タクシン派を叩くためであれば、クーデタは肯定しうるということである。実際のところ、彼は 2 度のクーデタを批判したことがなく、むしろタクシン派對策の手緩さを繰り返し批判してきたのである。たとえば、2017 年 3 月には、改革の立ち後れを批判し、暫定憲法 44 条の絶対的権限を有効に活用すべきだと主張していた。軍事政権からの感謝は、皮肉や社交辞令ではなく、本音であろう。

もう一つ指摘しておくべきは、頻繁に用いられる「改革」という言葉の曖昧さである。これは民主主義観の曖昧さと関連している。PDRC は選挙よりも先に改革と主張した。NCPO はそれに応えて、クーデタ後に改革に乗り出している。ティーラユットはその進捗状況がよくないと批判した。改革は何を指しているのか。何をどう変えるのかと問うたとき、明解な回答が戻ってくる可能性は低い。改革とは、汚職をタクシンと同一視し、汚職撲滅に仮託してタクシン派の影響力を削減することを指していると考えてよかろう。言い換えると、タクシン派が選挙で勝てないようにすることである。ティーラユットは、2006 年 8 月には選挙よりも立憲主義が重要と述べており、2015 年 8 月には民主主義を「捨てたり休んだりしてもよい」と述べていた。マス・メディアの「寵児」ティーラユットとは異なり、庶民が声を政治に届ける方法はもっぱら選挙に限られる。それをなくすことに痛痒を感じないのは民主主義者ではない。